

まえがき

本書の前身「大学生の有機化学」を上掲したのは2002年であった。気がついてみると、それからほぼ20年が経過してしまった。この間、世間の関心事にも大きい変化が生じているし、化学で重要な要素を占める諸定数の定義や数値も変わってきている。さらに、先端の技術にも大きい進歩が見られる。化学分野に限っても、日本人のノーベル賞受賞者が大幅に増えた。

さらに、私は中学・高校の時代から学校の教科書にはあまり魅力を感じる事ができなかった。ページ数が限られているので仕方ない事であろうが、教科書にはただ事実が述べられているだけでいかにも味気ない。なぜそのような考えがでてきたのか、その思考経路が述べられていない。さらに、(化学に限って言えば)上級の知識であるとして記述が省かれている事項もあるので、教科書に述べられている事実からだけでは明らかにたどり着けない結論が平気でまかり通っている。

なんとかして“教科書であることを意識させない”、“読んで楽しくウソのない物語書”をつくることはできないものだろうか。これが私の生涯にわたってのテーマになっている。何度かこのテーマに挑んでみたが、いまだにこの目的は達成できていない。でも、まだまだ諦めてはいない。

ここで「大学生の有機化学」の内容をもう一度見直し、新しい時代に即し、かつ面白い教科書にできないだろうか。

ところが、この作業が予想以上にむづかしい。本書はあくまで有機化学を初めて学ぶ人たちを対象にして知識ゼロからでも学べる書を目指している。そこへ最新のトピックスを織り込んで、どう折り合いを付けながらまとめればよいのか。どちら付かずの中途半端な書きものになりそう。まだまだ試行錯誤、暗中模索が続きそう。挫折感を感じながら、老人の最後の御奉公、その経験をちょっぴりご披露しながら、将来のある若者達に少しでも化学の楽しさを味わってもらえるような作品に仕上げたいと情熱を燃やしている。

基礎化学の知識があれば、有機化学の各論的な諸反応や緒官能基の化学を勉強し、理解することは容易である。しかし世間では、有機化学は暗記物であるとすら考えられている。いくら“容易である”と叫んでも、この先入観は一向に消えそうにない。そこで著者は、有機化学は応用化学の一つであり、基礎さえしっかりできていればその応用は極めて“容易である”ことを証明したい。

本書は、「第1編 官能基の化学」、「第2編 化学反応の機構」を柱として構成されているが、その基本となる基礎化学に立ち返ることができるように「特別講義編」を別にまとめた。本文中に **特** と表示しているので、適宜のぞいて確認していただきたい。

また、最近では高校の化学教科書にも重要単語の英訳が付けられるようになってきた。その潮流に従って、本書にも英訳を付随させることにした。何かの折に役立てていただきたい。索引もできるだけ充実させたつもりである。

最後になったが、車椅子生活を送っている私でも、単に若い人たちが支払ってくれる保険料におんぶに抱っこで生きていくのではなく、ごくわずかながらでも後輩たちに、これまでに蓄積されてきた財産を残してあげることができそうだと、毎日の生活に喜びを感じる機会を与えて下さった三共出版株式会社の社長、秀島功氏ならびに、編集部をはじめとする社員の皆さんに厚くお礼を申しあげたい。

2023 年秋

世間のコロナ禍をしり目に 著者記す